

変わらない心を贈る―『伊勢物語』二〇段試論―

亀田夕佳

【要旨】

『伊勢物語』二十段には、「かへでのみみぢ」を介した贈答歌が語られているが、従来その意味については専ら「女の心変わり」もしくは「男の思いの強さ・祝意」として解釈されてきている。本論では「かへで」に「変へで」の意を重ねる「歌ことば」の用例が存することを指摘し、本段のやりとりが「かへで／変へで」という「変わらない心」を贈る前提で行われたものであることを新たに考察する。

一、問題の所在

『伊勢物語』二〇段には次のようにある^①。

むかし、男、大和にある女を見て、よばひてあひにけり。さて、ほどへて、宮仕へする人なりければ、帰り来る道に、三月ばかりに、かへでのみみぢのいとおもしろきを折りて、女のもとに、道よりいひやる。

君がため手折れる枝は春ながらかくこそ秋のみみぢしにけれど、
とてやりたりければ、返りごとは、京に到着きてなむもて来たりける。
いつのまにうつるふ色のつきぬらむ君が里には春なかるらし

（一三二〜一三三頁）

男が大和の女と結婚したが、しばらくして宮仕へのために帰京することになった。男が京に向かう道で、美しい「かへでのみみぢ」とともに歌を贈ると、女は男が京に帰ったタイミングで返歌を届けたという。

右の贈答歌は「かへでのみみぢ」に託して心情を詠んでおり、相手への気持ちの強さを詠んだ男の贈歌に対して、切り返していく女の返歌という形は、典型的であるといえる。特徴的であるのは、一般に「もみぢ」が秋の景物であるところを、本段では「三月ばかり」として「春の紅葉」を取り上げている点である。

「三月のみみぢ」については、早くに柿本奨氏により考察がなされ、「病葉と考へるほかはない^②。」とされている。しかし実際の植物のありようはそれとして、「和歌表現」としての意味については、考察の余地が残されているように思う。

平安時代の文学作品には、しばしば物とともに和歌を贈る行為が描かれる。そうした場合に、贈る「物」が「ことば」を抱えるとの指摘が本田恵美氏によってなされている。本田氏は、和歌と共に贈られる「物」が「へことば」性を帯びる^③とされ、『伊勢物語』三段の「ひじきも」について詳細に考察をされている^④。「物」と「ことば」との分かちがたい関連を指摘された点、首肯すべき見解である。

本論では、『伊勢物語』二〇段において、和歌が「かへでのみみぢ」

と共に贈られる意味について、従来指摘のない「楓／かへで／変へで」の掛詞を新たに指摘し、考察するものである。本段で贈られる「かへで・楓」は、「かへで・変へで」との分かちがたい連想関係にある「歌ことば」だと考えられるのである。このことの意味を問いたい。

まずは「かへでのみぢ」がどのように解釈されてきたかを確認しておく。

二、「かへでのみぢ」についての諸説

述べたように、二十段の贈答歌は春の三月に紅葉が贈られている。秋の紅葉が一般であるところからは「春の紅葉」は特異なものであり、従来この点を取り上げて、解釈されてきているが、大別してA、女の心変わり、B、男の思いの強さが読み取られてきている。いくつか具体的に示しておく⁴⁾。

A、女の心変わり

a、『伊勢物語肖聞抄』

「君がこころもしょうつろふか〈中略〉女の心をうたがひていひなせる也」

b、『伊勢物語惟清抄』

「春ナガラ、カクモミヂスルハ、君ガ心ノ、ウツロフユヘニヤト云心也」

c、『伊勢物語闕疑抄』

「君が心のあきが有故にかく色付かと云心也」

d、『勢語臆断』

e、『伊勢物語古意』

「君が心に我をあきてふ事あれば、御為にとて折りたる枝すらもうつろふ色の侍るよとよめる也」

右は、「かへでのみぢ」に女の心変わりを認めるものである。a「女の心をうたがひて」、b「君ガ心ノ、ウツロフユヘ」、d「はやうつろふか」は女の不実を読み取るものであろう。そのことを、c「きみが心のあき」、e「我をあきてふ」は「秋／飽き」の掛詞として読み取っているといえる。

男の贈った「紅葉」を「秋／飽き」の象徴とし、女の不実を詠んだする立場に対して、「春の紅葉」であることを踏まえて「男の思いの強さ」として理解する立場も見られる。以下のようなのである。

B、男の思いの強さ

f 『伊勢物語愚見抄』

「君が為にと手おれるえだなれば、もみぢすまじきころなれど、かく色づけるといへり。わりなき心の色をもみぢにつけていへる歌也」

g、『伊勢物語新釈』

「師説に、此歌の意は、君にわが心ざし深きにかなひて春ながらも秋のごとく色ふかく染たりといふ意なるべし」

h、『評釈伊勢物語大成 増補版』

「秋を、厭の来る色に染め出でたといふ注が多数であるけれど、詞書に「いとおもしろきを折りて」と書き、歌に「君がため手折れる枝」というた詞の響きが、厭味をいふのには調和しない。」⁽⁵⁾

f 『愚見抄』は女の不実ではなく、男の思いとして解釈する早い例である。g 『新釈』は「師説」として本居宣長の説を引用している。そしてh 『評釈伊勢物語大成』では、『愚見抄』にも言及があった「君が為」の表現内容を根拠とし「厭味をいふのには調和しない」として、相手の不実を詰る「秋／飽き」とする解釈を排している。以下i〜jとして示すように、現行の主な注釈書は主としてでは、この指摘を受け、男の思いの深さ、強さという歌という解釈に落ち着いた状況にある。

i、『新潮日本古典集成 伊勢物語』

「あなたのためにと思つて折ると、春でもこのように紅葉になる、すばらしいことだという意味」⁽⁶⁾

j、『新日本日本古典文学大系』脚注

「私の心もあなたへの思いに、色濃く染まっています」⁽⁷⁾

k、『新編日本古典文学全集』頭注

「紅く色づくのは、あなたを思う私の心の色で染まったのです。の意をこめる。思ひ(緋)の色で染まったというつもりである」⁽⁸⁾

l、『伊勢物語全読解』

「紅葉の紅は、血の涙で染まった袖の色を連想させるものだったのではないか」⁽⁹⁾

現行の注釈書は「かへでののみち」を「男の思いの深さ」としてとらえているが、『全読解』はその思いの強さを「紅葉の袖」という読みぶりがあることを根拠として「血の涙」で染まったのだとしている。一首が「袖」という衣服と結びつく必然性については検討する必要があるが、歌ことばの表現を手掛かりに考えてゆく点において考えさせられる指摘である。

さて、ここまで諸注釈の解釈を確認してきた。男の和歌における「秋のみち」が「秋／飽き」との連想にあることから、初期には「女の不実」とする解釈が見られたが、一首においては「君がため」の一語との矛盾があることから、現在では「男の思いの深さ」が読み取られている状況を述べた。

「君がため」の表現については大井田晴彦氏により「真心こめた贈り物をする時の常套句。」との指摘がある⁽¹⁰⁾。この表現は、しばしば正月の若菜摘みなどに用いられており、行事や季節ごとの挨拶などの公的な場での和歌に用いられている。「君がため」が用いられている和歌がいかに大切な贈り物という表現であるかを確認しておこう。

大伴坂上郎女歌一首

m、五月之 花橘乎 為君 珠尔社貫 零巻惜美

(さ)つきの はなたちばなを きみがため たまにこそぬけちらまくをしみ) (万葉集、巻八、夏相聞、一五〇二)

左中弁よしみつの朝臣の人の馬のはなむけする所に、幣に書かんとてよませたる

n、いとまだきみゆる紅葉は君がため思ひそめたる幣にざりける

（貫之集、七三四）

はるかむの宰相、左近の中將にて、紅梅を折りておこせたりし
 o、君がため我がをるやどの梅花色にぞいづるふかきこころは
 とある返し

色もかもともにほへる梅花ちるうたがひのあるやなになり
 （兼輔集、六、七）

p、にほひうすく咲ける花をも君がためをるとしをれば色まさりけり
 かへし

をらざりし時よりにほふ花なればわがため深き色とやはみる
 （敦忠集、四一、四二）

右は、m「花橘」、n「幣（紅葉）」、o「梅花」、p「花（枝）」を「君がため」に贈るといふ和歌である。m「橘」は花も実も「玉に貫く」と詠まれる植物であるが、「散らないように」としている点に相手への思いを読み取ることができるであろう。nは「馬のはなむけ」とあるように、旅立ちの無事を祈念して贈ったものであるが、早々と色づいた紅葉は自分の深い思いで染まった幣なのだとしている¹¹⁾。

続くo、pにおいても贈る側の心が贈る事物に作用して彩りを増していると詠まれている。oでは「梅の花」では「深き心のさま」を示し、pでは「にほひうすく咲ける花」が「色まさりけり」とされている。これら二首はともに贈歌であるが、返歌ではその思いの深さが切り返されている点は、『伊勢物語』二〇段の贈答歌と同趣向であるといえよう。

以上、「かへでのみぢ」がどのように解釈されているかを確認してきた。繰り返しになるが、一般に「もみぢ」が「秋／飽き」の景物であることから、「女の心変わり」と解されることが多かったが、右に述べ

てきたように、「君がため」という、相手を思う心からの歌であることを宣言する表現が用いられている点との関わりからは、「男の強い思い」が読み取られる傾向にあることがわかった。

ここで改めて問題になるのは、そもそも「三月」の「もみぢ」がどのようなものとして捉えられているかである。時節を外れた紅葉はしばしば和歌に詠まれているが、その点について考察しておきたい。

三、時節を外れた紅葉について

『伊勢物語』二〇段では「三月ばかりに、かへでのみぢのいとおもしるき」が贈られる。紅葉が秋の景物であるために、三月の紅葉が特別に取り上げられたわけだが、時節を外れた紅葉には以下のようなものが挙げられる。いくつか示そう。

正月まゆみのみぢにつけて、大納言

時雨をばまちもつけてや山の端のおのれまだきに紅葉そめけむ

かへし

ア、まちかねて移るふ枝のあたりにには人にしられぬ秋やきぬらむ

（中務集、一六〇、一六一）

三月ばかりに、雨ふる日、かつらのみぢ人のもてまるれり

イ、春さめとみるはしぐれかおぼつか霞をわけてちれるもみぢば

御かへり

ちる花をとづるかすみは春ながらにしの山べも紅葉すらしも

（斎宮女御集、二四九、二五〇）

夏杵の紅葉のちり残りたりけるにつけて、女五のみこのもとに
 ウ、時ならで杵の紅葉ちりにけりいかにこのもと寂しがるらん

(拾遺集、卷第二〇、哀傷、天皇御製、一二八四)

太政大臣かれがれになりて四月ばかりにまゆみのもみぢを見て
よみはべりける

エ、すむ人のかれゆくやどは時わかず草木も秋のいろにぞありける

(後拾遺集、卷十六、雑二、藤原兼平朝臣母、九一七)

六月に木の紅葉ちたるをとりて歌よみて、雅正の朝臣のもとよ
りおくれる

オ、秋こそあれ夏の野べなるこのには露の心のあさくも有るかな

とある返し

カ、夏なかに秋をしらする紅葉はは色ばかりこそかはらざりけれ

(貫之集、八七八、八七九)

六月をほり

キ、下紅葉秋もこなくに色づくはてる夏の日にこがれたるかも

(好忠集、一七六)

アは「まゆみのもみぢ」は正月、イ「かつらのもみぢ」は三月に詠まれたものである。時節としては珍しい「もみぢ」に託して和歌が贈られているが、秋の景物である「しぐれ」との連想関係が詠まれている。時節を外れた「もみぢ」は、「もみぢ」であるがゆえに「秋」の事物との結びつきが却って明確化される傾向がある。

ウは村上天皇が更衣源計子が亡くなった際に、娘の女五宮盛子内親王に向けて詠んだ歌である。「柞」は「母」重ねた表現である。「時ならで」は、季節外れに色づいた柞が散ってしまったことをいう表現であるが、いうまでもなくその場合の「時」は「秋」のことである。季節外れであっても「紅葉」は「秋」との強い連想関係にあることがわかる。

同様の傾向は、エ後拾遺集、オ貫之集においても指摘できる。エは夫であった太政大臣の愛情が薄らいだこと、「まゆみのもみぢ」に寄せて嘆く歌である。「時わかず」は四月であるのに「秋のいろ」に染まってしまったことをいうが、この「秋」には「飽き」と不可分であろう。

続く貫之集の贈答歌においても人心の頼め難さが六月の「夏なか」の紅葉を通して詠まれている。オ「秋こそあれ」、カ「秋をしらする」は、「木の紅葉たる」事物がなければ詠まれえない表現である。オ「心あさく」とあるところからは、ここでの「秋」には「飽き」が張り付いていると考えられる。

キ好忠集では「下紅葉」の色づきを「六月」という夏の終わりであることを踏まえて「夏の日にこがれたる」としている。この和歌の「秋もこなくに」の表現は「紅葉」が「秋」の景物であることを逆手にとった言い回しであろう。

さて、『伊勢物語』二〇段の「三月のもみぢ」を考えるために、時節外れの紅葉について考察してきた。多くの用例を見出すことはできなかったが、秋以外の季節においても、「もみぢ・紅葉」とされる場合、「秋」との連想とは切り離しえないと考えることができた。ここで改めて問題になるのは、本章段の和歌「君がため手折れる枝は春ながらくこそ秋の紅葉しにけれ」の解釈である。

先に、「二、「かへでのもみぢ」についての諸説」で確認したように、現行の注釈書では、「君がため」の内容との齟齬が生じるという判断から、「秋の紅葉しにけれ」を「女の不実」ではなく、「男の思いの強さ」として解していることを述べた。

確かに、「君がため」に主軸をおいて理解しようとする、「いとおもしろぎを折りて」とあることから、男の深い思いの表れとして「かへ

での「もみぢ」を捉えるべきだといえるだろう。

しかし一方で、ここまで確認したように「秋の紅葉」という表現は、「秋／飽ぎ」と否応なしに結びついてしまうものだともいえる。「秋の紅葉」に「飽ぎ」の響きを認め、女の不実をいうとする解釈は、古注釈に多くみられたものだが、その解釈を簡単には否定できないことになる。

結論めいたことを述べておくと、この和歌の基盤は男の深い心尽くしにある。だからこそ、その上で「秋／飽ぎ」を戯れのように言いかけることが可能になったのではないだろうか。男の思いの強さは、贈った「かへで」にも込められていたと考えられるのである。

従来言及がないようだが「かへで」は、「変わらない思い」をいう「変へで」との掛詞としての用法が指摘できるのである。

四、「かへで」「こついで」―「楓／変へで」の掛詞―

ここまで「かへでのもみぢ」がどのように解されてきたかを確認し、検討してきた。ここで改めて考えたいのは、あえて「かへで」が選ばれた理由である。「もみぢ」をいうのであれば、「かへで」でなくてもよいはずだ。なぜ「かへで」であったのか、本論ではその理由として「楓」が「変へで」と分かちがたい植物であったことを挙げたい。以下、具体的に示す。

法皇、寺めぐりしたまひける道にて、かへでの枝ををりて
A、このみゆきちとせかへでも見てしかなかる山ぶし時にあふべく

（後撰集、巻第十五、雑一、素性法師、一〇九二）

Aは宇多天皇が讓位の翌年十月に吉野宮滝や竜田山などをめぐった際に、素性法師が詠んだ歌である。道すがら折り取った「かへでの枝」に託して宇多法皇に従うことのできる幸せを寿いだものである。和歌における「千歳かへでも」は「千歳変わらぬ」とする予祝の言葉であるが、新日本古典文学大系『後撰和歌集』の脚注が「かへで」は「変えないで」の意の中に、詞書にある「楓」を掛ける¹²⁾と述べるように、「かへでも」は「変へでも」と贈られた「楓」を重ねた表現だと考えることができる。即ち、「楓」は「変わらない」意を抱えた植物であると考えられるのである。

かへで

そせい

B、今さらに心はかへでよはへんといひしことばにあざむかれつつ
ただふさ

C、よし野山きしのもみぢし心あらばまれのみゆきを色かへでまて
（古今六帖、第六帖、四〇九九〜四一〇〇）

B、Cは『古今六帖』第六帖「木」に「かへで」として採録されているうちの二首である。Bは誠実を約束した相手の言葉を信じ、裏切られてしまったことを詠んだ歌だが、「心はかへで」の「かへで」は「変へで／楓」の掛詞として取り入れられている。Cは吉野山の紅葉に対して行幸を待つように呼びかける歌である。行幸の主体が誰なのかは判然とは示されないものの、宇多法皇とする指摘もあり¹³⁾、仕える主君に対して、「不変」を詠みあげる寿ぎの歌だといえよう。

こにおくれてなげき侍りけるころ、ここひの庄といふところ

よりくだ物たてまつれりける、こに青きかへでの葉おしたりけるを見て

D、いろかへでときはながらにあるものは

ここひのもりのなげきなりけり

(続詞歌和歌集、巻第九、哀傷、よみ人しらず、四〇五)

Dは子に先立たれて悲しんでいると、「ここひの庄」から籠に入れられた果物が届けられたのだが、そこに「青きかへで」の葉がつけられていたのを見て詠んだ歌である。「籠」は「こ／子」を掛詞として連想させるものである。青々とした葉は「色かへでときはながらに」と詠まれているが、その変わらない「かへで」によって、変わり果てた今の状況が否応なしに突き付けられているのである。後に述べるが、「変へで／楓」は、当然のことながら、楓が色づく植物であることを前提した表現である。考察を続ける。

いまは阿弥陀仏を心にかけてまつりて、とく死にて極楽に
まゐらむことをのみ思ひはべりてぞ、あけくれ西を見やりつ
つあかし暮らしはべる、をさな物どもの、かへでをとりもて
きたる、見れば、てふの飛びかかりたるやうに花さく物なり
ける、をかしよう見えて

E、名にしおへば色かへでこそたのまるれ

こてふににたる花も咲きけり

(成尋阿闍梨母集、一六九)

Eは、『成尋阿闍梨母集』の末尾近くに語られた場面である。遠く大陸に渡ってしまった子息成尋を思い、悲嘆に暮れる日々を綴った作品で

ある。帰らぬ息子を思つて、自らも極楽に往生したいことばかりを考えていたある日、阿闍梨の母のもとに幼い者たちから「かへで」が届けられた。ちょうど楓の花が咲く季節であったのだろう、蝶のような花をつけた枝であった。それを見て詠んだ歌である。

「名にしおへば」は「楓」が「変へで」の名を身に備えていることをいう¹⁵。また「こてふ」は「来てふ」が掛詞とされる。ここには、成尋が渡唐する前の変わらない時間を希求し、そのために早く帰ってきてほしいと、叶わぬ願いが呟くように歌われている。「楓」は秋になれば色を変える植物である。それでも「変へで／変わらない」意を名として持つために、叶わないと知りながらも頼みにしてしまう親心が詠まれているのだといえよう。

F、秋ともみどりのかへであらませば

散らずぞあらまし紅葉ならねど

(是貞親王家歌合、六五)

Fの『是貞親王家歌合』は、「秋」にまつわる題材を取り上げた歌合であるが、右の歌では秋になっても「みどりのかへで」があれば、紅葉のようにきれいな色づきはないけれど、散らないはずであるとしている。ここには「みどり」であることが「かへで／変へで」の掛詞と結ばれている。

ここまで「楓・かへで」が「かへで・変へで」の意を掛詞として帯びている用例を考察してきた。二〇段で男が贈った「かへでのみぢ」の「かへで」には「変へで・ずっと変わらない」というメッセージが込められていたのではないだろうか¹⁶。

四、「かへでののみぢ」について―謎かけの贈歌―

『伊勢物語』二〇段の「かへでののみぢ」について考察してきた。男は大和の女のもとから京に上る途中で、女と一緒に見たいと思うような枝ぶりの楓を見かけた。「かへでののみぢのいとおもしろき」は「君がため」の初句が示すように、女への思いやりに満ちた贈りものであった。これから離れて暮らさねばならない女に対して「かへで／変へで」を贈り、「変わらない」心を届けようとしたと考えられる。

興味深いのはそれが「のみぢ」したものであり、否応なしに「秋／飽き」を連想させてしまう点である。変わらない心という植物に、ほんの少しスパイスを利かせるような趣が「紅葉」にはある。諸注釈を確認した際に、A「女の心変わり」、B「男の思いの強さ」という二つの解釈の方向があることを示したが、B「男の思いの強さ」を基盤としながらもA「女の心変わり」を加えてみせたのが二〇段の「かへでののみぢ」であったとはいえないか。

贈歌に対して答歌が返される際、さまざまな選択肢が想定される。その数多い可能性から一つを選んで答歌が詠まれるのである。贈答歌の関係を考える際に、表現の照応関係が論じられるが、それは最初から決まったものではありえない。贈る側がさまざまな「謎かけ」¹⁶を用意する場合もある一方で、答える側がさまざまに「謎とき」をする場合もあろう。

二〇段の女の答歌が、京に着くタイミングで届けられ、そのことが「君が里には春なかるらし」という切り返しと絶妙に合っている気の利いたものであることは諸注釈に指摘されている通りであるが¹⁷、そうした返しの前提には、男に対する信頼が不可欠であろう。男が「かへで」に託

して贈った「変わらない心」について、女は深く理解した上での切り返しであったのだといえよう。

以上、二〇段について「かへでののみぢ」の掛詞を指摘することにより、考察を行った。

【注】

- 1 『伊勢物語』、『万葉集』の本文は、新編日本古典文学全集により、『万葉集』以外の和歌は、新編国歌大観により、歌番号等を記した。私に表記を改めた箇所がある。和歌の用例検索には「日本文学 Web 図書館」(株式会社古典ライブラリー、二〇二二年二月)を用いた。
- 2 柿本奨「やよひの紅葉―伊勢物語第二十段―」(『平安文学研究』、第十三号、一九五三年一月、一四頁)。
- 3 本田恵美「伊勢物語」における〈物ことば〉表現」(『国語国文 研究と教育』、第四四号、二〇〇六年三月、二九頁)。「物ことば」については、小川幸三「『紫式部日記』これ、遅くは悪からん」鶏肋―〈物ことば〉論序説のための序章―」(『国語国文 研究と教育』、第四一号、二〇〇三年二月)が定義をしている。
- 4 『伊勢物語』の古注釈は、竹岡正夫『伊勢物語全評釈 古注釈十一種集成』(右文書院、一九八七年)による。
- 5 新井無二郎「評釈伊勢物語大成(増補版)」(代々木書院、一九三二年、二四五頁)。
- 6 渡辺実校注「新潮日本古典文学集成 伊勢物語」(新潮社、一九七六年、三四頁)。
- 7 秋山虔校注「新日本古典文学大系 伊勢物語」(岩波書店、一九九七年、九九頁)。
- 8 福井貞助校注・訳「新編日本古典文学全集 伊勢物語」(小学館、一九九四年、一三二頁)。
- 9 片桐洋一「伊勢物語全読解」(和泉書院、二〇一三年、一七三頁)。
- 10 大井田晴彦「伊勢物語 現代語訳・索引付」(三弥井書店、二〇一九年、五三頁)。
鈴木日出男氏は「相手に何かを贈って誠意を表そうとする恋歌の常套句。」とされている(『伊勢物語評解』、筑摩書房、二〇一三年、七五頁)。
- 11 田中喜美春・田中恭子「貫之集全釈」(私家集全釈叢書二〇、風間書房、一九九七年、

- 五一—四頁）は、「深く思いを染めることによつてそれが周囲に感染する。」と解する。
- 12 片桐洋一校注『新日本古典文学大系 後撰和歌集』（岩波書店、一九九〇年、三二—四頁）。
- 13 石塚龍麿『校證古今歌六帖（下）』（有精堂出版、一九七四年、三七五頁）は「寛平法皇」ではないかとする。
- 14 宮崎莊平『成尋阿闍梨母集 全訳注』（講談社学術文庫、一九七九年、二二—八頁）は、「かへで」に「変へで（様子が変わる）ことなく、の意」をひびかす」とする。
- 15 『伊勢物語』九六段には、男と別れるさいに「かへでの初紅葉」を贈る物語がある。この「かへで」についても掛詞を前提に考えたい。
- 16 「謎かけ」については、注3本田氏の論考にも説かれておられる（三〇頁）。
- 17 注7秋山氏は「さわやかな切り返しによつて、男は斥けられるのではなく、かえつてその才覚にひきよせられることになるのではなからうか。」と注している。